

食生活を考える  
～子どもたちのより良い食習慣づくり～

I 主題設定の理由

「食」は子どもたちの健やかな成長を支えるうえで、重要な役割を担っている。しかし、現在の子どもたちを取り巻く食環境は、手軽に好きな食べ物を手にすることができる豊かな環境ではあるが、嗜好の偏りや乱れた食習慣をまねき、子どもたちの健康を脅かす要因ともなりうる状況である。

食に関する授業実践をとおして、子どもたちが食に対する興味関心や食べ物・栄養についての知識を高めることで、子どもたちがより良い食習慣を身につけ、子どもたちの健やかな成長を支えることができると考え、本テーマを設定した。

II 研究の内容

1 ティームティーチングによる授業研究

(1) 小学校第6学年学級活動「旬の食材を食べよう」

授業者：牧丘第一小学校 岩下 城，小林 智子

内容：食材には旬があり、旬の食材には優れたところが多くあることを知り、実生活に生かしていく力をつける授業。

成果：食材カードや栄養価のグラフなど、視覚に訴える教材が効果的に使用され、子どもたちの学習意欲を高めていた。班活動の際に、研究会に参加した栄養教職員が各班に数名ずつ加わり、アドバイスする展開が設定されていた。栄養教職員が専門的な知識を生かして関わることにより、学習内容が深まった。さらに、旬の食材を使ったおかずを考えるという活動を取り入れ、旬を知ることによって終わることなく、実生活に生かせるような授業内容になっていた。

(2) 小学校第1学年学級活動「食べ物の名前を知ろう」

授業者：後屋敷小学校 海沼 潤子，早川 里美

内容：食べ物の名前を知ることにより、食品や料理に興味関心を持たせる授業。

成果：給食に頻繁に登場する食品の実物を使用し、食品の名前やその食品で作られる料理名をクイズ形式で出題する。答え合わせに、その料理を給食室で実際に作っている映像を活用することにより、子どもたちの興味関心を引き、集中力を高めていた。後半の展開では、その日の給食で食べた食品を取り上げることで、日々の給食時の指導へとつなげていけるような授業実践だった。授業後の研究会では、とにかく、せっかくの機会なので、あれも見せたい、これも見せたいと広がり過ぎてしまうところ

ろを、使用した映像が授業展開に必要な部分だけにとどめてあり、良くまとまっていた。授業内容も、クラスの実態にあったもので良かった。という感想が多く出された。授業者からは、この授業で終わりではなく、毎日の給食指導・食の指導に生かしていきたいという感想も出された。

## 2 調理実習 「麺打ち・おざら作り」

山梨の郷土食である「おざら(ほうとう)作り」を麺打ちから実習をした。

初めて経験をしたという部会員も多く、各学校での活動に生かせる実習ができた。

## 3 学習会 「放射能と食品」(環境科学検査センター 薬学博士:小林規矩夫先生)

部会員から希望の多かった内容で講演会を実施した。専門的な内容の講演のあと、素朴な質問にも講師の先生に答えていただき、全ての人に身近な問題である「放射能と食品」について学習し理解を深める良い機会になった。

# III 成果と課題

## 1 成果

- ・ 管理職・学級担任・栄養教諭・栄養職員のそれぞれの視点をもって意見を交わすことができ、組織として充実した研究ができた。
- ・ 授業研究と学習会(調理実習・講演会・情報交換)の2本柱で研究を進め、充実した内容だった。
- ・ 授業を実際に見ることで、食教育のための効果的な指導方法(教材の使い方、発問のしかた、ワークシートの活用など)を学びあうことができた。
- ・ 食教育の授業では、児童の実態をふまえた内容が有効であること、学級担任と栄養教職員が連携を図り、それぞれの専門性をいかしたTTの授業が効果的であること、家庭との連携が不可欠であること、授業で終わりではなく授業をきっかけに日々の積み重ねが大切なことを確認した。

## 2 課題

- ・ 他校の実践や授業研究を各学校の実践に結びつけていくような取り組みが必要。
- ・ 指導案検討の時間が思うように確保できなかった。
- ・ 中学校の授業実践を実施したい。

## 3 来年度に向けて

- ・ 研究内容は、今年度の研究をさらに深めていきたい。
- ・ 指導案検討の時間をもう少し取れるように計画したい。
- ・ 一人一実践は、食教育を進めていくきっかけになり、多くの実践を学べる良い機会なので、今年度の研究に加えて取り組んでいきたい。

(部長 五味 秋津)